

『グリーンブック』

2018年／アメリカ／ピーター・ファレリー監督作品

いずれ二人は心の友となる

会員 齊藤 有里 (76期)

誰しもが一度は耳にする「人種差別」。1960年代まで刊行されていた黒人のための旅行ガイド「グリーン・ブック」の名を冠するこの映画は、人種差別に関する我々の認識に一石を投じる、事実に基づいた物語である。

物語の舞台は1962年の米国。主人公は、ピアノの才能に恵まれ音楽家として成功する黒人（作中の表現に倣いこのように表記する）「ドクター・シャーリー」と、ナイトクラブで働くも店舗が閉店し、働き口を探すイタリア系の「トニー・ヴァレロンガ」の二人。この物語は、ドクターが米国南部を回るコンサートの運転手兼ボディガードとして、トニーを雇うところから始まる。

ドクターとトニーは正反対である。ドクターは裕福なひとり暮らし、トニーは裕福ではないが家族に恵まれた生活をしている。また、ドクターはきちりとした厳格な性格であるが、トニーはルーズで賭け事が好きな粗暴な性格である。また、トニーは黒人差別主義であるとうかがわれる描写が、映画冒頭では散りばめられている。

トニーは、黒人差別主義ではあったが、ドクターが演奏するピアノによる表現それ自体はツアー当初から気に入っている様子だった。ドクターとトニーは正反対であるため衝突は多いものの、「一度でもコンサートに穴をあけたら報酬の半分がなくなる」という契約であったために、黒人を理由に差別を受けるドクターをフォローし、差別を目の当たりにすることを経て、ツアー後半に行くにつれ次第と心境の変化が訪れる。

『グリーンブック』
¥2,200 (税込)
発売・販売元：ギャガ
© 2019 UNIVERSAL
STUDIOS AND STORY
TELLER DISTRIBUTION
CO., LLC. ALL RIGHTS
RESERVED.



ところで、1960年代当時の米国南部は、特段黒人に対する差別がひどい地域だった。そのため、黒人ピアニストとして成功するドクターが南部でコンサートツアーを行うにあたって、当然トラブルに遭遇する。例えば、黒人が一人でバーを利用しているというだけで絡まれ殴られる、夜に出歩いているという理由だけで警察に捕まる、黒人であることのみを理由に、スーツの試着や、レストランでの食事を拒否される等といったトラブルがあった。

このような時代において、ドクターは、「成功した」黒人である。そのため、ドクターは、白人が大半を占める成功者としてのコミュニティにも、「一般的な」黒人としてのコミュニティにも属せず、孤独であった。そして、トニーは、南部ツアーを経て、ドクターの孤独を救う存在となる。

なお、最終的にコンサートツアーが成功に終わったのかについては、映画に結論を委ねることとする。

この映画は、苛烈な差別があまり身近ではない現代日本において、当時の黒人差別の有様を、映像を通して知ることができる物語である。表現としては柔らかいニュアンスを用いているものの、ドクターが黒人を理由として明確に差別される様子は非常に印象的である。また、それだけでなく、差別意識が強い当時の世の中において、人種の垣根を越えて友情を築いたドクターとトニーの物語であり、ストーリー性が高く、ユーモアもあり、伏線回収が美しい。

扱う題材はシビアであるものの、鑑賞後はすっきりとした多幸感が味わえる、おすすめの映画である。